

倫理的に生きることと理性的に生きること

——八重樫徹『フッサールにおける価値と実践』 の価値、理性、愛をめぐる——

佐藤 岳詩

(熊本大学)

1. はじめに

一般に、およそ古典と呼ばれるような優れた道徳哲学の書には、多かれ少なかれ、メタ倫理的な要素が含まれている。それはアリストテレスのものであれ、カントのものであれ、同様である。しかし、その要素を現代のメタ倫理学と通約可能な仕方に取り出してくるには、両者に対する深い理解が求められる。下手をすれば、両方の側からの徹底的な批判にさらされることになるだろう。メタ倫理学を専門とする評者は、フッサールを中心とした現象学の議論はどうやらメタ倫理的にも重要であるようだ、とうすうす感じてはいたものの、そうした事情に臆して、これまで現象学者の議論を遠くから眺めることしかできなかった。

他方、平明かつ独創性の溢れるフッサール解釈はもちろんのこと、上記の難題に果敢に挑み、現象学とメタ倫理学を堂々と架橋して見せたのが、本書『フッサールにおける価値と実践』である。その卓越した技量と視野の広さには感嘆せざるを得ない。今後、日本において現象学からメタ倫理学へ、メタ倫理学から現象学へ、それぞれを専門とする論者が双方向の議論を行っていく際に、必ず参照すべき一冊と言えるだろう。

したがって、本稿はこれからそうした建設的な議論を進めていく際の一助となるべく、主にメタ倫理学の観点から、同書において再構成されたフッサールの議論の検討を試みる。その際、まず第二節で、筆者の議論を確認する。ついで第三節では、倫理と価値、理性、愛という三つの概念に焦点を合わせて、議論を行っていく。

2. 八重樫解釈によるフッサールのメタ倫理学

本稿では主にメタ倫理学の観点から、同著の筆者である八重樫氏のフッサール解釈を検討していく。その前段階として、まず本節では、筆者が再構築したフッサールの立場は、現代メタ倫理学においてどのように位置づけられるか、同書第四章から第六章の議論に即しつつ、価値、道德判断、人生の意味の観点から改めて描き出してみたい。

2.1 価値についての主張

メタ倫理学上の諸理論は、さまざまな観点から分類されうるが、道德的価値をめぐる存在論上の主張についての大きな区分としては、実在論と非実在論がある。すなわち、道德的価値は何らかの形で実在すると主張する実在論と、それらは実在するものではないと主張する立場である。加えて、その価値を客観的または絶対的であるか、主観的または相対的であるかによって、強い立場と穏やかな立場が分かれていく。

八重樫氏はこの問題を本書第四章「価値はいかにして構成されるのか」を中心として扱っている。そこでの解釈によると、フッサールの立場は、「①価値に関する見解には正しいものと間違っているものがあり、②その正しさは、個別の主体や共同体の評価および評価傾向に依存しない」（143）という意味で、客観主義的なものである。しかしながら、ここでの客観性は、価値が普遍的で絶対的なものであることを意味するわけではない。筆者によれば「<端的に望ましい>とか<端的に悪い>といった価値は存在せず、価値はいつでも観点相対的で文脈依存的な性質」（175）に過ぎない。したがって、フッサールの立場は価値が評価者から完全に独立しているという強い実在論にコミットするものではなく、「評価作用が内在的正当性をもたらすということの意味するにすぎない」（259）。換言すれば、「「しかじかの文脈でしかじかの観点から見ると、これこれのことには価値がある」と正当に言うことができる」という穏やかな非実在論または実在論的な主張と理解することができる。

2.2 道德判断についての主張

続いて、第五章「道德的判断と絶対的当為」に進んで、道德判断の本性についての、筆者のフッサール解釈を見ていこう。従来のメタ倫理学上の標準的な立場においては、しばしば次の三つの見解が提示される。

事実判断が客観的で規範性をもたないのに対し、

- (a) 道徳的判断は客観性に加えて、独自の規範性をもつ
- (b) 道徳判断は客観性をもたず、独自の規範性をもつ
- (c) 道徳判断も客観性もち、独自の規範性をもたない

この区分で言うならば、筆者はフッサールの立場を (a) であると考えているように見える。それによれば、まず、道徳判断は客観的なものである。「道徳的判断が客観的だといわれるときには、多くの場合、それが一般にどんな行為者にも当てはまる、つまり普遍妥当性をもつということが意味されている。……道徳的判断は二つの意味で客観的である。まず、道徳的判断は、それが正しいときには、あらゆる可能な行為者についてあてはまる判断でなければならない。また、道徳的判断は状況づけられた行為タイプの客観的な性質についての判断である」(192-193)

他方で、道徳判断は規範性をもつものでもある。「道徳的判断の行為に対する規範性は、行為者が自らの誠実な道徳的判断に反する行為をした場合には、その行為は不合理だとみなされるという事実に存する」(189)「道徳的判断が変化すれば、行為の動機もそれに応じて変化する。あるいは少なくとも、変化すると期待してよい。道徳的判断と動機のあいだの結びつきは、道徳的判断の実践性と呼ばれる」(190)。このように、道徳判断は規範的で実践的なものでもあるのである。

さらに、この客観性、規範性、実践性をもった道徳的判断は他の価値判断と違って、「絶対的当為」とかかわっている。「それは、「私は何をすべきか」という道徳的な問いの答えになるような当為である。この場合の絶対的というのは、行為者相対的でないということ、つまり普遍妥当性を要求するということの意味する」(197)。そしてこの絶対的当為は「そのつどの可能な行為のなかで最も善い行為」(197)であり、「汝のそのつどの実践的領野全体のうちで達成可能な善のうちの最善をなせ」(202)という形式で表される。

簡単にまとめておこう。筆者によれば、フッサールにおける道徳判断とは、客観的であり同時に独自の規範性をもつ。それは「「達成可能な最善のことをせよ」という、誰にでもあてはまり、それをしなかったなら不合理だと見なされるような判断」として言い表される。

2.3 人生の意味についての主張

本書の第六章「有限性、愛、人生の意味」では、主に人生の意味についての議論が展開される。これについても、従来、メタ倫理学では以下の三通りの立場が主張

されてきた。すなわち (a) 道徳はときに人生に意味を与えるものと対立する、(b) 道徳は意味のある人生の必要条件または十分条件である、(c) 道徳と人生の意味は関係しない、の三つである。(a) はB.ウィリアムズらの主張に、(b) はP.シンガーらの主張などにみられる。

他方、筆者の立場は以下のようにまとめられる。

- ① 少なくとも、不合理なこと、見込みのないことを追求する人生は無意味である (219-234)
- ② 客観的価値に方向付けられた使命に規定されていない人生は生きるに値しない (235-255)
- ③ 道徳的生は見込みのあることであり、また客観的に妥当な普遍的使命の追及を求め、また、愛と対立もしない (225-255)

したがって、筆者の解釈によれば、倫理的に生きること、私たちの生は意味をもつし、そこには愛する対象をもつことも含まれる。これは基本的に上記の (b) の立場と言っていいように思われる。特に、愛と倫理はときに対立する、という典型的な (a) の立場には、フッサール本人の主張を超えて、明確に反対している。

2.4 小括

本節の内容をまとめると、筆者の考えるフッサールの立場は以下ようになる。

私たちは、①「しかじかの文脈でしかじかの観点から見ると、これこれのことには価値がある」と正当に言うことができるし、その中でも、道徳的な価値にかかわる判断は、道徳的判断と言われるが、これは②「達成可能な最善のことをせよ」という、誰にでもあてはまり、それをしなかったなら不合理だと見なされるような判断なのであって、その判断に従って生きる、すなわち、③倫理的に生きること、私たちの生は意味をもつし、そこには愛する対象をもつことも含まれる。

「一言でいってしまえば、フッサールにとって倫理的な生き方とは、理性的であろうと努める生き方である」(217)

3. いくつかの疑問 ～ 価値、理性、愛

前節では、第四章、第五章、第六章を中心に、主に現代メタ倫理学との対比の観点から、本書の内容を概観してきた。はじめに述べたように、本書において特筆すべき点の一つは、現象学とメタ倫理学を架橋して、そのような読みを可能にすること、それが妥当かどうかの議論を可能にすることにある。そこで、本稿でも以下では価値、理性、愛という三つの側面から、筆者の解釈するフッサールに対していくつかの疑問を呈してみたい。

3.1 倫理と価値

本書によれば、倫理的な生活形式は、唯一絶対的で客観的な価値をもつものとされる。「使命にしたがう生は「唯一絶対に価値のある」生き方としての「倫理的人間の生活形式」から区別される」(210)、「道徳的行為がもつ善さは倫理的生の善さ由来し、倫理的生の善さはそれが実践的反省能力の究極的な発揮の産物であることに由来する」(214)と言われるように、他の単なる使命に従う生とは違って、実践的反省能力すなわち理性の究極的な発揮において、私たちの倫理的生は唯一絶対の価値をもつのである。

しかし、こうした倫理的な生の捉え方に関して、二つの疑問が生じる。第一に、倫理的な生活形式がもつ価値も価値である以上、本書の第三章の論旨によれば、感情によって把握されるはずだが、唯一絶対的で客観的な価値がもたらす感情というのはいったいどんな感情なのだろうか。逆に言えば、現れている感情から、価値の性質は構成されるはずだが、唯一絶対的で客観的な価値の存在を知らせる感情とは、いったいどのような感情なのか、想像がしにくい。さらに言えば、価値であるからには、その感情にも正当化の基準があるはずだが、これもまたどんなものなのか、考えるのが難しい。

これは一般的なメタ倫理学において、客観的な価値が理性や直観によって直接的に把握されると説明される際に生じる問題と並行している。特に直観主義においては、そこで用いられる「道徳直観」とはどのようなものなのかについては、G.E.ムーアの『倫理学原理』(1903)以来、今日に至るまで、様々な議論が展開され続けている。同様に、感情に重要性を見出すフッサールの倫理学では、価値そのものの説明に加えて、独自の感情の説明を用意しなければならないはずであるが、それが何なのか、本書からは読み取りにくい。

第二の問題は、価値の相対性・客観性の問題である。2.2節でまとめたように第四

章において価値は観点相対的であると説明されていたはずだが、なぜ倫理的な生活形式だけは唯一絶対的と言われるのだろうか。価値は本当は相対的ではなかったのだ、と認める用意がないかぎり、実践的反省能力の究極的な発揮の産物が価値をもつというのも、特定の観点、特定の文脈から見れば価値をもつ、とすることに過ぎないのではないのだろうか¹。

たとえば「実践的反省能力は人間の本質に属しており、人間の本質がそのようなものであること自体は端的な事実である」(214-5)といった主張は、文脈主義を真剣に採用するならば、本来、理性主義者の観点にとって事実であるに過ぎないように思われる。にもかかわらず、ここで筆者の解釈する立場はその観点を飛び越えて、どこでもないところ (the view from nowhere) から「真の自我」「真の人間」像なるものを描いてしまっているのではないのだろうか。

以上をまとめるならば、結局、唯一絶対的で客観的な価値とはどんなもので、何によってその唯一性、絶対性、客観性が担保されるのか、わからないのである。

3.2 倫理と理性

前項の実践的反省能力の問題をさらに掘り下げて考えてみよう。本書によれば、「倫理的な生を生きるとは、人間の本質をなしている生全体にかかわる反省の能力によって要求される」(214)とも言われるように、反省し、理性的になろうと努める生き方こそが倫理的な生き方である。とはいえ、こうした倫理における理性の強調には何らかの正当化が必要であることには筆者も自覚的である。「問題は、このように考えたときに、理性的な意志だけが道徳的に善い意志だということをどのように主張するかである」(206)。

しかし、他方で、その正当化に答えは与えられない。「道徳的行為がもつ善さは倫理的生の善さに由来し、倫理的生の善さはそれが実践的反省能力の究極的な発揮の産物であることに由来する。……もし、この到達点において、さらに根拠の問いを立てるなら、「人間が実践的反省能力をもつこと自体はなぜ善いといえるのか」と問うことになる。しかし、この問いに答えはない。実践的反省能力は人間の本質に属しており、人間の本質がそのようなものであること自体は端的な事実である」(214-215)。

だが、フッサールに内在的に考えたとしても、現代的視点から見ても、この結論

1. 後期のフッサールは、倫理と愛が対立しうるとすることで、この論点を深刻視しているように見えるが、筆者は愛を倫理の中に位置づけてしまうので、この問題が残るように思われる。

で言われていることが端的な事実であるとは考えにくい。前者から言うならば、構成分析で感情が担う大きな役割を考えれば、むしろ、感情に重きを置いた倫理学ではなぜ駄目だったのか。現代メタ倫理学の用語で言えば、しかるべき場面でしかるべき仕方です「感じる」感受性や性格こそ重要なのであって、そこでいちいち「反省」するのは「ひとつ余計な思考」(one thought too many) だという方向をとらないのはなぜか。前項でも指摘したような共感を中心に据えた倫理、直観主義、あるいは罪悪感や恥といった道德感情を中心に据えた倫理というオプションがある以上、人間が反省的存在であることが端的な事実であり、それを用いることこそ倫理の基礎であると言われても、ただちにそれが決定的であるとは思われない²。

そしてもう一つの問題は、H.シジウィック以来の実践理性の二元性である。すなわち理性の働きを突き詰めて考えたときに残る、自己利益を最大化しようとする慎慮 (prudence) に基づいて行為する理由と、利他的な考慮に基づいて行為する理由をどのように調停するのか。あるいはどちらを選んでも非倫理的にしか見えないような選択肢の間で選択が迫られる悲劇的ジレンマや、非倫理的なことをすることが政治的には正しいとされるような汚れた手 (dirty hand) のケースもあるが、それらはどのように説明されるのか³。結局のところ、人間の本質が仮に反省的であることにあっても、反省的であることだけにあるとは言えないのではないか。そして、反省によってもたらされる理由のすべてが倫理とかかわるわけでもないのではないだろうか。

3.3 倫理と愛

さらに、この反省をめぐる論点は愛との関係においても問題をもたらす。本書によれば、(フッサールに反して) 愛は反省のうちに位置づけることができ、その意味で、倫理的生の一部に含まれるとされる。たとえば、「いまや、この実践的反省能力は愛ないし使命をもつ能力も含むと考えられる。……もし広い意味で何かを愛することができないとしたら、自分の人生が全体としてどのような人生なのかを反省的に見いだすことができず、したがってそれを正当化したり反省したり批判したりすることもできないだろう」(249) とか、「愛や使命によって生き方を規定される能力と、生き方をより理性的なものにしようとする態度は、道徳的な行為者の本質にと

2. Cf. B. Williams [1993] *Shame and Necessity*

3. 近年のメタ倫理学ではそれゆえに規範性や理性、理由といった概念を、倫理そのものとは切り離して検討する傾向にある。(cf. D. Parfit [1997] *On What Matters*, R. Crisp [2008] *Reasons and the Good*)

もに属している。このように考えるなら、愛の価値を客観的価値に回収することなく、本節で問題にしてきた緊張関係を解消することができる」(250)と述べる箇所には、筆者の独自の思想が現れている。

しかし、こうした反省能力の中に愛する能力を含めてしまうことには、問題があるように見える。まず、本書では愛もまた反省の対象になるという意味で、倫理的な生活形式のうちに置かれることになる。だが、それは同時に、愛もまた反省にさらされるものとなることを意味する。「……愛の価値とそれに由来する当為は、たんなる主観的な現象にとどまるものではなく、客観的な妥当性を要求する。あらゆる感情がそうであると同様に、愛もまた、正当性を問うことのできる作用である。……「なぜ愛する価値があるといえるのか」と問われれば、「私の人生にとって欠くことのできないものだからだ」、あるいは「これを愛さないことは私には不可能だからだ」と答えるだろう」(253)

だが、それでもなお、ある種の愛は客観化、理性化を拒否するのではないだろうか。反省され、理性化された時点で、それは回顧的な第三者的な視点にさらされたものになり、もともとの一人称的(前人称的?)で直接的な愛からは変容してしまっているのではないだろうか。そのような正当化は、そしてそこで用いられる「しかじかの理由ゆえに、この人を愛することは正しい」という言説は、確かに、誰かに責められたときの申し開きや弁明としては役に立つだろう。しかし、それは当人にとって本当に必要だろうか。「自分が愛しているものが本当に愛するに値するのかを問うことはつねに意味をなす」(264)で言われるところの、「意味をなす」がいかなる意味をなすのか、特に、当人にとって必要なことなのか、そもそも意味をなさねばならないのか。

こうしたことの問題点がある程度、筆者は理解している。その上で、筆者は「母親にとって子どもへの愛の正当性を問うことが意味をなさないとか、正当性を問う必要がないと考えるのは誤っている。むしろ、母親の愛が正当化に開かれていないとしたら、彼女は道徳的な主体ではありえないのである。もし、「子どもを愛する母親は道徳的な主体である必要はない」というなら、母親を尊厳と責任のある人格として認めないことになる」(251)と述べる。

しかし、それでもなお、この主張がウィリアムズやS.ウルフが提示した問題乗り越えられているとは思われない⁴。火事が起きて、自分の子か、大司教を助けるべきか、という場面で、他の誰かによって自分が尊厳と責任のある人格であると認め

4. S. Wolf [1982] "Moral Saints", [1997] "Meaning and Morality", Williams [1981] "Persons, Character, and Morality"

られるかどうかなど、母親本人にとってどうでもいいのではないか。あるいは、自分の愛が道徳的に正しいからという理由で、助けられた子どもは、義務からのお見舞いを受けた友人と同じくらいがっかりするのではないだろうか。ここで評者が言いたいことは、「その母親を人格として認めないことになる」という事態の捉え方への疑義である。筆者は「愛の価値とそれに由来する当為は、たんなる主観的な現象にとどまるものではな[い]」と言うが、なぜ愛を「価値」と「当為」という仕方で捉えねばならないのか⁵。「なぜ愛する価値があるといえるのか」と問われれば」と筆者は記すが、そもそも問うことが余計ではないのか。そもそも母親の行為を人格という観点から切り取らねばならないという見方が、3.1でも取り上げた理性主義を素朴に前提としたものではないだろうか。それは結局の所、後期フッサール自身が脱しようとしたものではなかったのか。こうした解決は結局、彼が真剣に引き受けた愛の問題に十分に答えていないことになるように見えるのである⁶。

さて、本節の議論は理性や反省という概念を中心として以下のようにまとめ直すことができよう。

(1) 実践的反省能力の究極の発揮が唯一絶対的で客観的な価値をもつという捉え方は、価値の相対性と齟齬をきたすのではないか。

(2) 理性や反省能力は本当に倫理の唯一の基礎となるのか。

(3) 愛は本当に理性や反省能力のうちに包摂できるのか。

そしてここから評者が最終的に問いたいのは、やはり倫理的生もまた相対的な価値しか持たず、それはフッサールにおいては理性主義というプリズムを通じて見た価値でしかなかったのではないか、ということである。そしてそうだとすれば、倫理と理性、愛の関係にはまだ別の捉え方があるのではないだろうか。

4. おわりに

以上、様々な論点を取りあげてきたが、本稿で指摘した諸問題は、基本的に、筆

5. たとえば、こうした見方自体を、I.マードックは選択の倫理として批判している。I. Murdoch [1956] “Vision and Choice in Morality”

6. あるいは仮に反省と愛が関係するとしても、それは筆者が述べるように反省の中に愛が位置づけられるという形ではなく、むしろ愛をもってしなくては、世界と正しく向き合い、世界を正しく捉えるという実践には従事できないという意味で、すなわち反省を可能にする条件として、愛が要請される、というプラトン主義的な理解の方に、評者は共感を覚える。(cf., I. Murdoch [1970] *The Sovereignty of Good*)

者の再構成した議論を決定的に論駁するようなものではない。感情や直観に基づく議論にはそれ自体として問題も多い。あるいは、反省を経ない愛は結局の所、歪んだ自己愛などであって、本当の意味で愛と呼ぶには値しないのだ、という応答もあり得よう。したがって、評者が期待するのは、こうした論点を出発点として今後、新たな議論が展開されていくことである。筆者自身の言葉で述べるならば「そうした作業は……現代の倫理学および道徳心理学における理性主義と感情主義の対立のなかにフッサール倫理学を位置づけることとして、今後なされるべきだろう」(265)。そして、もちろん、そうした作業の可能性を開いたこと自体が、すでにして、本書の大きな功績であることは言うまでもない。これから議論が深まっていくにつれ、本書が有する価値もまた何度でも再確認されることになるだろう。

文献

- ・ R. Crisp [2008] *Reasons and the Good*, Oxford University Press
- ・ R. Hursthouse [1999] *On Virtue Ethics*, Oxford University Press
(邦訳：土橋茂樹訳『徳倫理学について』知泉書館, 2014)
- ・ G.E. Moore [1903] *Principia Ethica*, Cambridge University Press.
(邦訳：泉谷周三郎・寺中平治・星野勉訳『倫理学原理—付録:内面的価値の概念/自由意志』三和書籍 2010)
- ・ I. Murdoch [1956] “Vision and Choice in Morality” *Proceedings of the Aristotelian Society*, Supplementary Volumes Vol. 30, pp. 14-58
- ・ I. Murdoch [1970, 2013] *The Sovereignty of Good*, Routledge
(邦訳：菅豊彦・小林信行訳『善の至高性』九州大学出版会, 1992)
- ・ D. Parfit [1997] *On What Matters*, Oxford University Press
- ・ B. Williams [1981] *Moral Luck*, Cambridge University Press, pp.1-19
- ・ B. Williams [1985, 2011] *Ethics and the Limits of Philosophy*, Routledge
(邦訳：森際康友・下川潔訳『生き方について哲学は何が言えるか』産業図書, 1993)
- ・ B. Williams [1993, 2008] *Shame and Necessity*, University of California Press
- ・ S. Wolf [1982] “Moral Saints”, *The Journal of Philosophy*, vol. 79, No. 8, pp.419-439
(邦訳：佐々木拓訳「道徳的聖者」『徳倫理学基本論文集』勁草書房, 2015)
- ・ S. Wolf [1997] “Meaning and Morality” *Proceedings of the Aristotelian Society*, New Series, Vol. 97, pp. 299-315

・八重樫徹 [2017] 『フッサールにおける価値と実践 ～善さはいかにして構成されるのか』 水声社